

課題名 広葉樹利用の新たな可能性に向けた取組について

静岡県東部農林事務所
森林整備課 鈴嶋 康子

1 課題を取り上げた背景

静岡県の林業・木材産業は、スギやヒノキの生産が主流ですが、当事務所が所管する伊豆地域では、森林面積の約5割が広葉樹です。生産林としての広葉樹林は無く、スギやヒノキの森林整備と併せて伐採され、大径のものは市場へ出荷することもあります。豊富にある広葉樹資源の積極的な利活用が、県東部地域の課題の一つと言えます。

静岡県は、かつて木工職人が全国から集められ、家具の一大産地へと発展し、その影響で、広葉樹を挽く製材工場等も発展してきました。しかし今では、県内にあった広葉樹市場も無くなり、家具に利用される広葉樹の地域産材の流通は、極わずかです。家具職人、広葉樹を挽く製材工場、森林資源があるにも関わらず、地域の広葉樹材を使う流れはほとんどありません。

2 具体的な取組

令和元年に、地場産業の振興を行う課に配属となり、家具産業振興の担当となりました。そこで、地域の広葉樹をもっと活かしたい思いのある林業・製材・家具関係者、デザイナー、プランナー、静岡大学、及び県がひとつとなり、地域材を活用する「ヨキカグ・プロジェクト」を立ち上げました。

ヨキカグでは、様々な樹種を対象に、木の持つストーリーを大切にしながら家具の製作や情報発信をしています。静岡大学とコラボした、大学演習林内の自生している早生

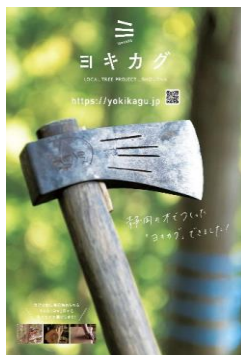


写真1 ヨキカグ
リーフレット

樹を活用する実験的な取組では、在来の早生樹の活用可能性を探りました。

その後、東部農林事務所に配属となり、林業経営体の方々に働きかけ、これまでに2者が、伐採した広葉樹をヨキカグに搬出しました。

3 取組の結果

広葉樹の搬出にあたり、林業経営体が自ら製材工場に搬出したことで、川中・川下側の人たちと交流を持つきっかけとなりました。また、元々は伐り捨てにする予定だった大径のケヤキを搬出してくれた際には、このケヤキの丸太を板に挽き、市役所と当総合庁舎にて展示を行い、多くの方に挽きたての木に触れてもらう機会につながりました。

山側には、広葉樹の需要があることを認知してもらい、木材の流通のしくみをつくること。そして、家具のつくり手側は、受け皿の幅を広げるとともに、顔の見える繋がりをつくることで、業界間の連携を太くし、森と人、人と人とのつながりをつくります。

そうすることで、そのストーリーやモノの価値を、山のきこりから使い手まで循環させていくことができれば、地域の豊かな森づくりと、豊かな暮らしをつくることにつながる、と考えます。

4 まとめ

身近な木を使うことは、木材の新たな流れを生み、販路を多角化させるとともに、つくり手側の受け皿を広げ、新たな価値を創出することにつながります。ストーリーが見える家具は、使い手側の安心・安全にもつながります。ストーリーが実感できる身近な木が、暮らしの中のいつも手に触れるところにあることが、地域の林業や関連産業の発展と、未来につながる持続的な森づくり、そして豊かな暮らしにつながると考えています。



写真2(上) 製材所搬入時
写真3(下) 様々な樹種の
スツール